

# 平成 28 年度弘前大学グローバル人材育成事業モデル事業

## 学生市民等協働プログラム報告書

申請者	所属部局・職名	人文社会科学部・准教授
	氏名	高島 克史
事業名	台湾人観光客数増加のための弘前市ガイドブックの開発	
事業の概要とその成果		
<p>【構成メンバー】12名</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・チームリーダー (部局名) 氏名 高島克史 職名) 准教授</li><li>・指導教員 (部局名) 氏名 森 樹男 (職名) 教授</li><li>・参加学生 (教育学部) 1名 (3年生)</li><li>・ " (人文学部) 6名 (3年生)</li><li>・ " (人文学部) 1名 (4年生)</li><li>・市民, 企業人 (株式会社コンシス) 1名 (グローバル事業部マネージャー)</li><li>・事務職員 (総務部広報・国際課) 1名</li></ul> <p>【実施期間】</p> <p>平成 28 年 9 月 13 日～平成 28 年 9 月 16 日</p> <p>【事業概要とその成果】</p> <p>本事業は「台湾人観光客を対象とした観光ガイドブックの開発」を行うことである。近年、外国人観光客を積極的に誘客するイベントやキャンペーンが企業にとどまらず、国や自治体で展開されている。その成果もあって、年々日本を訪れる外国人観光客が増加している。特に、台湾からの観光客数の増加は目を見張るものがある。</p> <p>弘前市や青森県も、台湾人観光客の誘客には積極的である。台湾人観光客に対応した観光マップの製作や市長自らのトップセールスなどがその代表である。その結果、弘前を訪れる台湾人観光客も年を追って増えてきている。しかし、日本国内のほかの都市と比べると海外における弘前市や青森県の認知度は低い。さらには、台湾において弘前市はおろか青森県について正しく情報提供されているわけではない。</p> <p>弘前市や青森県ではインバウンド観光に対応して多言語化した観光マップの製作やトップセールスが積極的に展開されている。その結果、弘前市内では外国人観光客を受け入れる体制が整ってきている一方で、海外では弘前や青森県の魅力や価値を正しく伝えられているわけではない。この点を是正することができれば、より多くの外国人観光客の誘客がより強く期待できる。このような認識の下、「弘前市・青森県の魅力を正しく伝えるためのガイドブックの製作と流通」を目的として取り組んだ。より具体的な事業の流れは以下の通りである。</p> <p>6月上旬に企業との顔合わせを行った。その際に、先述した目的と合わせて本事業のミッションとして「外国に対する情報発信による、外国人観光客の増加・消費額の向上」と「情報発信によってビジネスチャンスが生まれることを地域に示す」とした。</p> <p>なお、ガイドブックを作成するうえで台湾について必要知識の確認と獲得のため、インターネットを使った調査を始めた。その結果、「台湾人はとても親日的で日本との距離も近く訪日観光客では第1位となっていた」ことが分かった。さらに、青森県が台湾に向けてPR活動を行っていること</p>		

を確認した。具体的には、青森県知事やリンゴ娘が台湾を訪問し、青森県のPR活動を行っている青森県のリンゴ知名度が台湾人の5割の人々が知っているというアンケート結果などもあった。こういった積極的なPR活動の結果、台湾で人気のあるドラマでは青森県の観光施設である弘前城や鶴の舞橋などが撮影地になり、台湾人観光客が多く訪れていることが分かったのでガイドブック作成に大きなヒントがあるのではないかと考えた。

このような調査と企業との打ち合わせを進めながら、7月以降はガイドブック内容の検討を行った。台湾国内で販売されているガイドブックを調査したところ、青森県については歴史的建造物や温泉が主に掲載されていた。そういったガイドブックと差別化するために、高い認知度をほころりんごを中心としたガイドブックが台湾人にとって興味のあるものではないかと仮説をたてた。

このように6月から8月までは、インターネットにおける観光データならびに連携企業との打ち合わせ本学に来訪した台湾人へのインタビュー調査などを行った。

仮説検証と現地での情報収集のために、9月13日から16日にかけて、台湾南部にある高雄市を訪問し、現地調査を実施した。台北ではなく高雄に訪問した理由としては、台北には観光客やビジネスマンなど様々な台湾人が住んでいて、台湾人らしい台湾人を知るためには高雄がふさわしいと考えたためである。

現地での調査は、現地日本法人へのインタビュー調査と現地書店で陳列されているガイドブックの調査である。まず現地日本法人への調査では、9月14日午前に「日本航空高雄支店 北村克紀支店長」9月15日午前に「台湾交流協会高雄事務所副所長 山下文夫氏」からインタビュー調査を実施した。具体的には、「ガイドブック草案を提示し、それに対するアドバイスやコメント」「台湾人の観光や課ショッピングにおける特性に関する情報提供と意見交換」を行った。あわせて今後のガイドブック作成に当たって引き続きの協力を依頼し、快諾をえた。

次に、現地書店を手分けして回り、観光ガイドブックの売れ筋や書店の店員への聞き取りを行った。その結果、やはり残念ながら東京や京都などといったガイドブックが多く見受けられたものの弘前市はおろか青森県や北東北などについても十分な情報が掲載されたガイドブックを確認することはできなかった。

なお当初は、国立大学高雄大学の教員・学生と連携をしてアンケート調査を実施する予定であった。アンケート用紙は準備し、高雄大学との連絡もスムーズに進んであとは調査を実施するだけであった。しかし、数年に一度といわれる超強力な大型台風にあっけしきで、アンケート調査を実施することはかなわなかった。ただ、帰国後もメールで連絡を取り合いながら、できる限り調査ができなかったことによる不利益が生じないように努めた。

これら調査の結果、明らかになったことは以下のとおりである。

- ・青森産りんごの人気度は高いものの、それを生産している青森県や弘前市についての情報量は少ない
- ・青森県に特化したガイドブックは存在しない
- ・家族主義である(海外旅行は基本的に家族単位)
- ・年配になるほど青森県に関心は強くなる
- ・初めての日本への旅行では東北に行かない(東北に旅行するのは2回目以降)

これら調査結果をふまえて10月には、ガイドブック完成に向けコンセプトの再確認をした。そしてガイドブックの主な購買層を「購入するのは50から60代の人たちで日本への家族旅行を計画している家族」とした。また、青森県産りんごの人気が高いことから、りんごを中心としたガイドブック

を作成した。より具体的には、ガイドブックの半分はりんごに関連した情報を掲載した。残りの半分で宿泊施設などの情報を掲載した。11月には掲載許可を得るために、関連団体や企業に対して交渉を行った。許可が得られた組織団体からは写真の提供も求めた。

最終的なガイドブックの内容としては台湾での現地調査で青森県産りんごの高い人気があることから全24ページ中9ページをりんごの効能や成長過程、りんごを使ったお土産を掲載することにした。表紙もりんごの写真を載せ、りんごを意識させた表紙にした。りんごのページが終わると青森県の有名な観光地や自然景勝地を載せ、りんご以外にも素晴らしい観光資源があること台湾の方に知ってもらおう狙いがあった。その他にもガイドブックとして宿泊施設や簡単な指さし表、青森県の地図を掲載した。

しかし、本事業の課題として、ガイドブックの販売までには至らなかったことがあげられる。ガイドブックについての原価や価格設定までは行っている者の、その波及効果や実際の利益が検証できていない。また販売先として想定しているのは、JAL高雄支店長 北村氏の勧めもあり、台湾の旅行会社に販売することを考えてはいる。なおガイドブックについては12月9日に納品されている。